

令和3年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成	○ 健康な体の子ども	○ よく考えて最後までやりぬく子ども	○ やさしく豊かな心をもつ子ども
------------------	------------	--------------------	------------------

2 本年度の重点目標

(1) 園運営 (2) 教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> ・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、職員一人ひとりが明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。 ・記録をもとに遊びについて話し合い、大学と附属が一体となった共同研究の全体テーマのもと、園として研究を進める。 ・研究活動を生かしながら「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。 ・保護者の子育て力向上を支援する取組や子育て環境をよりよくするための取組を行い、子育て支援事業の充実を図る。
(3) 地域への貢献 (4) 他校種との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に向けて積極的に情報発信を行うとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKi」との連携を図る。 ・大学との連携として、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
園運営	○組織運営 ・職員一人ひとりの主体的な取組を促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員が自己目標を定め、園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、管理職が教員会議やその他の場面で機会を捉えながら指導を行った。 ・働き方改革を進めるべく、職務内容（配布文書の精選など）や行事の見直しに取り組んだ。 ・今年度も大学の「新型コロナウイルス感染症危機対策本部会議」に園長が出席することにより、大学と園が連携しつつ様々な対応に当たることができ、その内容を教職員にも周知徹底した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・附属学校園全体で働き方改革がテーマになっているが、まだ徹底できていない点も多い。来年度から、まず職員の出退勤時間の徹底管理と適正化に取り組みたい。
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け課題を確認しながら、計画的に保育を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程に基づき、学年経営及び学級経営の方針を立てて計画的に保育を進めた。 ・学期ごとに会議等で振り返り、達成状況や課題を確認しながら、保育の質を高めるよう取り組んだ。 	A	
	○説明責任 ・本園の教育方針や保育の内容について、管理職や担任が機会を捉えて伝えていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふよっこだより」を10回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取組等を伝え、園の保育や園児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。また、新型コロナウイルス感染防止についての園の取り組み、並びに保護者へのお願いを文書配布するとともに、緊急の場合にはメール配信を数回行った。 ・園の教育をさらに理解してもらうために、恒例の全学年の保育参観及び保育参加日（「ふよっこデー」）は今年度も実施できなかったが、降園時に各担任から学級の保護者に対して、その日の園児の姿に関して保育のねらいや幼児の育ちを個別に伝えるようにした。さらに、「誕生会」を利用して来園した保護者に対する懇談を丁寧に実施した。 ・今年度は情報発信を効果的に行うために園HPをリニューアルし、「出欠の連絡」がHPからできるようにするとともに、パスワードを配布して各クラスの様子を当該保護者だけが閲覧できるサイトも作成した。 	A	
	○危機管理体制 ・「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子供安全の日」における安全教育への意識付け(避難訓練等)及び施設設備の点検とその改善・拡充に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭を中心に新型コロナウイルス感染防止対策を徹底周知しながら講じた。 ・園内の施設、設備、備品等の安全点検を業者とともに随時行うとともに、PTA役員の協力で遊具の安全点検も行った。 ・各クラスで学年に応じた安全指導を行うとともに、コロナ禍であったが、地震や火災等の避難訓練を園児と教員で実施した。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度は附属学校園全体で「学校安全に関する事業」を文科省から受託した。それを契機に具体的に連携した取り組みをしていくつもりである。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究活動を生かしながら「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 「うれしのタイム」における遊びを通じた教育の充実を図るために、職員会議等の場において、具体的事例を題材にした情報共有を行いつつ、日々の保育に取り組んだ。 週の初めに、各学級の週案を副担任・養護教諭を含む全職員に配布周知し、全職員の共通理解を図りつつ計画的な保育が行えるよう取り組んだ。 園行事については、コロナ禍のため昨年度に続き中止を余儀なくされたものが多かったが、「運動会」や「生活発表会」などの代表的な行事については感染防止対策を講じながら無事に実施、終了することができた。 	A	
	<p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人のよさや特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に職員間で情報を共有し指導にあたる。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人の記録に基づき、環境の構成や援助を考えることを継続して行うとともに、定期的に職員で話し合いを行った。 週1回来園するキンダーガーデンカウンセラーに通常保育の観察をしてもらい、その内容について細かく職員に伝えてもらうようにした。また、求めに応じて保護者からの相談にも丁寧に応じてもらった。 加東市在住幼児に対しては、加東市発達サポートセンターはびあによる個別指導を受けた。 就学に向けて、希望進学先調査を行うとともに、担任や管理職が保護者からの進学相談に対応した。必要に応じて希望進学先と連携し、日常の幼児の様子を見もらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。 	A	
	<p>○研究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学附属共同研究の全体テーマを踏まえた研究に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度から新たに発足した「大学と附属学校園が一体となった共同研究」の位置付けの中、年度当初に園として「遊びの充実を目指す保育の再解釈と新たな実践」というテーマを設定した。具体的にはこれまでの遊びの記録の振り返りを行うとともに、園内研には大学教員に入ってもらいながらテーマの探究に取り組んだ。試行錯誤の連続であったが、今後につながる充実した一年であった。特に、本学大学院幼年教育発達支援コースの石野教授によるSTEAM教育の基盤としての身体性に関する講演は次年度以降の取り組みに大きな示唆をいただくことができた。 「幼小連携における適時型入学体験活動の試み（本学大学院溝辺教授が研究代表者）」という実践的研究に、実践者として主に5歳児担任が関わりつつ、共同研究として取り組んだ。 	A	
	<p>○子育て支援事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の子育て力向上を支援する取組や子育て環境をよりよくするための取組を行い、子育て支援事業の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 機会を捉えて幼児期の育ちについて伝えた（誕生会で集まった保護者に対し、子育ての悩みについて話を聞くとともに、適宜アドバイスを行った）。また、2月にはPTAの協力で横川前園長による子育てに関する講演も行うことができた。 就労等家庭の子育て環境の支援として、コロナ感染防止対策（換気の徹底とおもちゃ等の消毒）を徹底しながら、預かり保育を継続して実施した。 	A	

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ○開かれた幼稚園づくり ・地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年間通して実施するとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKi」と連携して、地域、幼稚園、家庭が共に育つ活動を展開する。また、HPを通じて積極的に発信を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度もコロナ禍が続いたため、子育て支援ルーム「かとうGENKi」との交流や連携はできなかった（園長が「かとうGENKi」の事業に参加する程度であった）。 ・開催できた行事（運動会や生活発表会）についても、最小限の公開（保護者2名もしくは1名のみ参加）にせざるを得なく、外に開いていく活動はほとんどできなかった。 ・下半期からリニューアルした園HPを通して積極的に情報を発信できた。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・この2年間のコロナ経験を活かして、来年度は学外者との交流を少しずつ元に戻していきたい。
	<ul style="list-style-type: none"> ○研究発表や公開保育 ・研究発表会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の園研究発表会は「兵庫県国公立幼稚園・子ども園教育研究会東播磨支部指定教育研究会」という位置付けでも開催させていただいた。オンライン開催となったが、学内外から多くの参加があり、成功裡に終えることができた。参加者からの事後アンケートでも、「大学との共同研究の取り組みによって園内だけではみられない議論や成果があった」と好意的な意見をいただいた。 	A	
他校種（小・中・高校・大学）との連携	<ul style="list-style-type: none"> ○校種間連携 ・近隣の高校も含めた他校種と連携し互恵性のある交流活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍ではあったが、上記の幼小連携に関する実践的研究の中で、附属小学校児童と5歳児園児が交流することができた。限られた回数ではあったが、幼稚園はもとより小学校にとってもスムーズな入学に向けて意味ある活動となった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・今回成果のあった幼小連携を来年度も継続していきたい。
	<ul style="list-style-type: none"> ○実地教育（教育実習） ・大学教育とつながりをもった効果的な初等基礎実習を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ感染拡大により、当初予定の5月実施が10月、11月の2回に分割となってしまった中での実習受け入れであった。園実習担当教員が大学の実習センター、並びに学生が所属する幼年教育発達支援コース教員と綿密な打ち合わせをすることで、大きな問題もなく無事に実習を終えることができた。なお、事後の学生による満足度は例年以上に高いものであった。 	A	
	<ul style="list-style-type: none"> ○大学との連携 ・大学教員を招聘して親子活動や保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど、大学との連携を密にした取組を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼年教育発達支援コースの大学教員には、本園教育の質の向上と研究推進のために、研究発表会への参画だけでなく日常保育についても数回観察してもらい、様々な助言を得た。 ・5歳児が伝統工芸士や兵庫県陶芸美術館スタッフの指導のもと園（遊戯室）において陶芸活動を行った。また、4歳児は芸術教育系コースの浅海教授の研究室を訪ねて陶芸活動を行うとともに、大学散策を行った。学外の方となかなか触れ合えない状況下で、園児には非常に新鮮な活動となった。ただ、親子活動については最小限の実施にとどめざるを得なかった（5歳児の竹馬作りのみ）。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は4歳児が大学を訪問して活動をすることができたことが大きな成果であったが、来年度は親子で参加できる企画を従来の形に戻していくことを検討していきたい。